

創世記2章18－24節

ヘブライ人への手紙2章(1－8)、9－18節

マルコによる福音書10章2－9節

本日から聖書日課使徒書は、特定の終わりまで、「ヘブライ人への手紙」(以下ヘブル書)となります。この手紙は、特定の教会に宛てた手紙ではありません。教えの部分と勧めの部分が交互に記されているような文書で、それゆえに説教集あるいは神学論集に近いとも言われます。また、『聖書』(旧約・七十人訳)からの引用が多くあり、キリストを大祭司と呼んでいます。その関係から、犠牲・聖所などの祭儀用語が多いのも特徴です。

伝統的にはパウロが執筆した手紙の一つとされてきました。現代ではそのようには考えませんが、著者や成立時期・場所は不明です。文章の名前に「ヘブライ人への」とありますが、ロマ書やコリント書のように、手紙自体にそのような記述はありません。ただし、内容から考えて『聖書』(旧約)に強い関心のある人々との間での文章であることは確かです。そして、手紙の終わりの方で「イタリア出身の人たちが」(ヘブル13:24)という記述がありますから、著者も受け手もローマ帝国内である可能性は高いでしょう。神殿祭儀などの関心は強いのですが、書かれた年代もエルサレム神殿が崩壊した70年により前ということはないと思います。

不明な点が多いヘブル書ですが、『聖書』への関心が強くあり、それゆえに、今日のわたしたちの状況と、『聖書』に関する感覚が異なる点には注意が必要です。教会の始まりにおいて、『聖書』は旧約と続編、それもおそらくはギリシア語のものでした。現代に生きているわたしたちは、旧約と『聖書』を読み、イエス様について様々な情報を知っています。その情報量は、ヘブル書の読者たちよりも多いといえるかもしれません。しかし、だからこそこの手紙を通して、イエス様を通して主なる神様を信じるとは、どういうことかを改めて学ぶことが大切なのです。

聖餐式聖書日課は、2章から始まっていますが、この手紙は、冒頭から、天使(御使い:口語訳までは「御使い」でした。新共同訳以降「天使」という訳になりました)とイエス様とを比較しています(1:5-14)。天使は、『聖書(旧約)』において、主なる神様と人間との仲介者的役割を持っています。しかし、1章では、天使があくまで仲介者に過ぎず、肉体をとり罪の清めの業を成就したイエス様とは異なると主張されます。天使は一時的ですが、御子イエス・キリストは普遍だからです。一章ではこの違いについて、七つの『聖書(旧約)』を引用し、天使と御子についてそれぞれ言及しながら説明します。そして最後に「**天使たちは皆、仕える霊であって、救いの相続者となる人々に奉仕するために、遣わされたのではありませんか**」(1:14)とまとめます。このように天使に関する関心が高いのも、初代教会の特徴といえるでしょう。

聖書日課では2章1節から8節は()に入っていますが、2章に入るとまず、天使と御子との違いが示され、御子であるイエス様によってもたらされた救いの出来事を、しっかりと心に留めなくてはならないことが勧められます(2:1-4)。『聖書』の小見出しで「大いなる救い」とある通りです。続いて詩編8篇が引用され、

イエス様が一時的に天使たちよりも低くされたことによって、死の苦しみを経験し、それ故に、全ての人の贖いとなったと主張されます(2:5-8)。ことに8節では、『万物をその足元に従わせられました。』『万物を彼に従わせられた』と言われている以上、この方に従わないものは何も残っていないはずです。しかし、私たちはいまだに、万物がこの方に従っている状態を見ていません」と、天使を通しては救いが完全に示されないことを語り、それを受けて9節以降が続きます。「万物がこの方に従っている状態」、それを「栄光と栄誉の冠を授けられた」姿のイエス様として見たのだと確信するのです(2:9)。またこのイエス様の苦しみと死の出来事は、「万物の存在の目標であり源である方に、ふさわしいことであった」とある通り、主なる神様の恵によるものであり、必然の出来事であったと認識されるのです(2:10)。

11節から13節では、そのイエス様と信仰者との関係が述べられます。つまりイエス様は、主なる神様の意思によってこの世に遣わされて、苦難を通して、救いの創始者として生涯を全うされたのですが、その清めるイエス様(聖とする方)も、清められる信仰者(聖とされる人たち)も、同じ主なる神様から出ている、その意味ではイエス様は信仰者と全く等しいのであり、それ故に、信仰者はイエス様から「きょうだい」と呼ばれるということです(2:11~13)。そして信仰者はイエス様の「きょうだい」であるが故に、「ご自分の死によって、死の力を持つ者、つまり悪魔を無力にし」と、信仰者にとって死すらも無力になるのだと主張されます(14節)。そして、「死の恐怖のために一生涯、奴隷となっていた人々を解放されるためでした」と、信仰があっても、死の恐怖に怯え、またその奴隷であったが、イエス様を信じる信仰者はそこから解放されると主張されます(15節)。16節から18節では、そうであるがゆえに、そのイエス様の働きが、信仰者にとっていかに重要であるかが語られます。

これらのことから、この手紙の著者が、「死」という事柄に強い関心を持っていることがわかりますが、「死」は、この手紙の時代の人々にも現代に生きるわたしたちにも共通した現象です。天地創造の初めに、主なる神様が良しとされた世界に「死」はありませんでしたが、同時に『聖書』は、すべての人間に死があることを前提としています。そして人間の死には様々な形態があり、悲しまれながら愛されながら起こる死があると同時に、戦いや憎しみの中で起こる死もあります。悲しまれ、愛されながら迎える死に、何の悩みもないとは言えませんが、争いや憎しみの中で起こる死は、さらなる悲しみを呼び起こします。18節は、そのような死を、あえて「試練」と呼んでいます。そうであるがゆえに、「事実、ご自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人々を助けることができになるのです」(2:18)と、イエス様の十字架での苦しみと死、そしてそれが終わりではないことを示す復活の尊さを浮かび上がらせています。

教会の信仰者とは、この救いを信じ、この救いに与るものです。そして、この救いを伝えるものです。同時に、信仰者一人ひとり、そして教会は、この救いから使命を示されます。今、世界中で試練が起こっています。今、わたしたちは祈ることしかできないかもしれませんが、争いあっているどちらかを正義として、どちらかの勝利のための祈りではなく、イエス様が大神父として犠牲となってくださった、だからもう犠牲は必要ないということによって示される、まことの平和の実現を祈りたいと思います。